

第3章 キャリアの接合点

— 南丹ラウンドテーブル —

北村 真也



「南丹ラウンドテーブル」の「南丹」というのは、この知誠館のある亀岡市を含む地域の呼称です。そして「ラウンドテーブル」というのは、この地域で青少年の支援に携わっている教育、福祉、心理等の援助者のための学びの機会として 2011 年に自主的に立ち上げられた学びの場です。それが 2012 年からは、京都府の地域力再生プラットフォームとしての位置づけを得て、今日に至っています。

南丹ラウンドテーブル自体は、年 4 回実施され、毎回 3 時間を通したディスカッションをおこないます。その実施においては 2 つの約束が決められており、毎回冒頭でそのことが繰り返し確認されています。一つは、参加者はその所属の一員としてではなく、個人として参加してもらうこと。そしてもう一つは、それぞれが当たり前に考えていることに対してあえて問い直しをおこなうというものです。例えば、日々若者の就労支援にあたっている人があえて「支援とは何か？」ということを考え直してみる、といったことです。この省察的な思考が、支援という大きな概念を揺さぶり、概

念そのものを更新させていくきっかけとなっていくことを期待しているのです。現場に働く人間は、私も含めて現実的な対応に追われ、俯瞰的な視点や大きな概念を更新させることに対しての意識が薄くなりがちです。そこにあえて楔を打ち、さらに自分たちとは違った領域の人たちから、違った角度の意見を求めることを通して、簡単には答えの出せない問いに考えをめぐらせてほしいと思ったのです。具体的な参加者としては、学校の管理職、教員、京都府（青少年、福祉、心理）の職員、児童相談所、保健所、NPO 職員、マスコミ、大学院生、大学生、知誠館の生徒や卒業生、その保護者等が挙げられます。

南丹ラウンドテーブルでは、知誠館代表でもある私が、ここで日々繰り返し広げられる若者たちのエピソードと、それを捉える私たちの社会臨床学的な視点を伝え、それをきっかけとして、参加者によるディスカッションがおこなわれます。そして、その進行は、京都学園大学人間文化学部教授の川畑隆先生にお願いしています。今年度のラウンドテーブルは、それまでとは少し趣向

を変えて「若者のキャリア」ということに焦点化して考えてきました。だから、本稿においてみなさんにご紹介するのは、若者のキャリアというテーマに沿ったラウンドテーブルの記録です。キャリア形成という課題を抱える若者たち、あるいはその渦中を生きている若者たち、そしてそのキャリア形成を支援する、あるいはその決定に関わる大人たち。そのようなさまざまな視点が交差する学びの場の可能性を考えてみたいと思っています。

なお、以下のエピソードに登場する南丹ラウンドテーブルの参加者のうち、塾長は私、北村真也、川畑は進行役の京都学園大学人間文化学部教授の川畑隆先生を指し、他の実名表記は知誠館のスタッフたちです。それ以外の参加者は、個人が特定されないようにすべてアルファベット表記とさせていただきます。また、発言の内容で個人が特定される可能性があるものにつきましては、具体名を省略しています。

1. 就活って何？

私たちが、「就活」ということを考えてみたいと思うようになったきっかけは、不登校やひきこもり経験を持った若者たちの就労支援のあり方を見て、疑問に感じる点があったからです。履歴書の書き方や面接の仕方、さらには挨拶の仕方まで、この就労支援プログラムでは、手取り足取りとっていいほど親切な支援活動がおこなわれているようでした。しかしその支援では、彼らのごく普通の大学生のように就活を経て

就労できるようになること、あるいはその状態に少しでも近づくことが目標とされているように思えました。つまりそれは、一般的な大学生の就活を目標においた援助モデルであるように感じられたのです。もちろん援助対象となる若者たちには、個々の状況があるため、それを考慮しながらではありますが、少しでも普通の大学生に近づけるように援助が行われているようでした。

しかし、私たちがふと疑問に思ったのは、「普通の大学生の就活は、果たして彼らのモデルとなり得るようなものなのだろうか？」ということでした。というのも、知誠館には、常に大学生たちがボランティアや教務補助という形で関わっているのですが、彼らの口から聞く昨今の就活事情に、少なからず違和感を覚えていたからです。そこで今回のラウンドテーブルでは、今就活の渦中にある3人の大学生をゲストに迎え、「就活」が実際どんな風に行われているのか、あるいはその渦中であって学生たちが何を感じ、何を考えているのか、といった話をもとにセッションを始めようと考えたのです。

まず最初は、私から参加者全員に向けて簡単な問題提起が投げかけられます。

塾長「就活って何だろう？っていうのが今回のテーマです。就活という一つの社会の現象。多くの学生たちは、いわゆる就活を通る…これ漢字で書いたらいいのか…今、片仮名で書いたりもするんですよ。私は、大学が1980年度生なんです。就活っていうのは、もちろん私たちの時もありました。ここに来られてる

皆さんのときもあったやろうと。でも、その時とは随分違う気がしています。それを通して、キャリアを考えたらどういうことになるんやろうか、っていうのがやりたいなと思って今回は企画をしてみました。それで…Bさんが、うちのスタッフとしてここで働いてくれるので。今就、活真っ只中の学生がうちには3人くらいいるのでね、どんな様子やとか話を聞いたりするんですけど。まあ非常に複雑な思いが正直あります。例えば、聞いたこともないコトバがあって、まず「ブラック」、私たちの頃、ありました？あるいは「圧迫面接」とかね。何がどういう風に行なわれてるのか？それから大学院の先生とかに話を聞くと、結構、就活で折れる学生が多いと。「大学出てこないや」という話をよく聞くんです。だから、その就活でいったい何が行われてるのかなと大いに興味を持ったのです。私たちはたまたま、不登校とかひきこもりっていう子のキャリアを実際どうサポートしていくか、いろいろ議論したりする機会はあるんですけど、不登校でもひきこもりでもない、ごく普通にそれなりの大学に行ってそれなりに社会に行こうとしている学生たちの流れの中に「就活」というものがあって。そこで行われてることとか、広げられてる世界っていうのが、あんまり健康なイメージがなくて。片一方で、いろいろ社会的にしんどい人たちのサポートを考えた時に、そうじゃない人たちのキャリアの形成っていうのを一つモデルにして、そこに少しでも近づくように何か手を打とう、っていう考え方もあるような気がするんですね。でも多くの人たちがたどる、キャリアへの入り口に当たる「就活」というものが、果たしてこれがモデルなんだろうかとということもものすごく疑問と

して思うんです。それは私がどうのこうの語るより、その渦中にいる人たちにまず一度来てもらって、一体そこで見てきたものって何なんやろう？っていう風なことで、今日は3人、お招きをしたんです。私たちは教育というフィールドにいますので、中学やったら高校に送ったらあとはもうわからないこといっぱいあるんやけど、その小学校、中学校、高校、大学、と行って、ちょうど社会との汽水領域に在るのがこの「就活」なんですよ。ここら辺のリアリティっていうものを、いろいろ生の声を聞くということがすごく大事な、ということで今回3人をお招きしました。A君とC君は今日僕初めて会ったんです。Bさんが連れてきた友達ということで今日私は初めて会いました。それで3人とも優秀な大学に行かれて。いろいろ戸惑いがあったり、こんなことになってるんや、っていう風に思う事が多分あると思うので、そこら辺のお話をぜひ聞かせてもらえたらなと思います。で、一人5分くらいお話をしてもらって、その後、ぜひこういう機会ですから、皆さんご質問いただきながら前半の場を動かしていきたいなと思います。じゃあ、早速ですけど…A君から、お話を」

キャリア教育の実践の場である学校、キャリア支援の実践の場である NPO や行政関連機関。その現場で働いている援助者たちは、果たしてこの就活の現状をどこまで正確に知っているのだろうか、彼らの目指す支援の方向性が、普通の大学生のキャリア形成へと向かっているのであれば、その実態をしっかりと直視するべきではないか、というのが私の考えでした。すべてはそこからしか始まりません。そこを知った上で、

その方向を貫くのか、あるいは方向修正していくのが問われるからです。

Aさん「はい。改めまして、Aと申します。私、今〇〇大学に通ってまして、未だ就活を続けています。内定を未だもらっていないということなんですけども。私自身「就職活動」っていうのが、大学1回生、2回生、3回生の時に、全然実感がわかなかったというか。社会人として生きていくということに対して全然実感がなかったというのもありまして、最初何から始めたらいいのかっていうのが全然わからなかつたんですよ。で、その中で周りが就活を始めて…就活って自分のタイミングやと思うんです。だけど、そのタイミングっていうのが、周りに流されて始めてしまうっていう子が多分多いと思うんですよ。で、その中で周りはいっしょに自分の意思を持って決めて、就活をやって。で、自分のタイミングで受かる、っていう人が多いと思うんです。最初に大学1回生、2回生、3回生で何をやってきたかって聞かれても、答えられない学生がすごく多くて。僕自身も何をやってきたかっていうのがつかめないまま就活を始めたので、あまり就職活動で自分をアピールすることができない、っていうことが出てきました。皆が受けるから選考を受けてみよう、っていう形で受けてみたり。でも、とりあえずっていう形で選考を受けることは就職氷河期である今、受かる理由にはならないので落ちてしまうことが多いんですよ。落ちてしまうことで、自分が否定されたような気持ちになってくるっていうのが素直に思った気持ちで。自分のやってきたことっていうのが…ビジネス・アイディア・コンテストだとか、ボランティアだとか、自分の中で行

動はしてきたつもりなのでそのことをアピールしたりするんですけど、それを受け入れてもらえないっていうのは、企業にとって不必要な存在であると言われてるようになってしまった。その中で自分自身、やってきたことに意味があったのか…意味があるに決まってるのに、意味があったんやろうかって、当たり前のことを疑問に思ってしまうっていうことがすごく多かったです。で、仲間が内定をもらったりすることで焦りを感じたり、プレッシャーになってストレスを感じたり。そこで心が折れてゆく学生っていうのはすごく多いんじゃないかなと思います。僕自身、今心折れてしまってるんですよ。内定も決まってないんですけど、説明会行った後に友達とカラオケに行ったり遊びに行ったりすることでストレスを発散する、っていうことがあってしまって、なかなか就職活動に対して向き合えない日が今続いています。そんな僕なんですけども、一応内定間近に行ったり、不動産会社の最終まで行ったり、出版会社にも内定もらえますよ、っていうところまで行ったりしたんですけど…。その、内定をもらえますよっていうところまで行くとして、自分がここでやりたいのかなっていうのを初めてここで問うんですよ。今までは業種に限らず受けてきたんですけども、そこで本当に自分が就職したいのか、自分がこれから40年間仕事をやっていくのかっていうところにすごく疑問を感じました。その中で、やっぱりこの会社じゃないっていう風に判断してしまって…この判断がアホやと言う仲間もいるんですけど、それで辞退してしまいました。で、私自身が素直に思うのが、40年間働いていく会社っていうのを、就職活動を真面目にやってるのが

今6ヶ月くらいなんですけど、その6ヶ月間で自分が40年間働く会社を決めるっていうこと自体に無理があるのと違うかなって思うんです。転職っていう方法は、今考えると厳しそうですし、早く決まる遅く決まるじゃなくて、本当に自分がやりたい、自分に合った企業を探していくことが大事なん違うかな、っていう風に思いました。で、これから夏にかけてまた就職活動始まっていくわけなんですけども、自分がやりたいと思った仕事に的を、職種とかも絞ってやっていこうかと、今考えています」

A君は現在就活に苦労している様子でした。3回生までただ何となく大学生活を過ごしてきて、就活が始まるや否や急に焦り始めるという話は、わかりやすいものでした。A君は、3回生になるまでも、ビジネス・アイデア・コンテストやボランティアなど、就活にプラスになるとされることをしていたようです。しかしその動機も、周りがやっていたので…といったように、あまり明確な意味づけがあったわけではなさそうです。

就活が始まってエントリーシートを大量に書き、また大量に落とされてしまうといった挫折経験の中で、今まで大学でやってきたことに果たして意味があったのかという振り返りが起こってきます。また仲間たちが内定を取り始めると、焦りと不安が押し寄せて心が折れそうになっていたと言います。そんな中、手あたり次第に受け続けるとどこかから内定は出るものの、今度は「本当にこの会社でよかったのか?」「この業種に興味があるのか?」「定年まで40年

も勤められるのか?」という不安が生じて、結局内定を辞退してしまったというのです。

塾長「どうですか、皆さん。何か思うところがあれば」

Fさん「僕らの時代とね、ものすごく違いますね。僕らの時は4回生の夏から全員がスタートやった。信じられへんかもしれないけどね。だから3回までは、勉強とか大学生活一色でしたよ。そんなことが許された時代だったんですね。で、おっしゃった中でね、「自分が社会人になる姿」っていう。僕、あの頃も全然想像つかなかったですよ。今でも覚えてますけども、教員に採用されて、辞令もらって、帰りのバスの中でじーっと外の景色眺めながら、俺これから教師やるんや、不思議やなーって思っていました。教師にはなりたかったんですよ、でもね、社会人という実感はね…。結婚もそうでしたよ。自分が親になるっていう実感も。ただね、自分にも子供がいて、子供がやっぱり3回生くらいから就活しました。大学の勉強何もできてない、って言ってました。何も楽しくなかったと。僕は大学めっちゃ楽しかったですわ。今でも戻れるんやったらあそこや思います。ただ、40年間っていう風に覚悟決めてたかっていうと、そこまで見通してたのかな、って。見通してなかったんじゃないかなって。今から思ったら青臭い感じやったかもしれませんが、頑張ろうと」

塾長「どうですか、聞いてて」

川畑「あの…辞退をしたっていう話ね。「お前何でやねん」って言う友達もいたって言ってたけど、けっこうたくさんの人に言った?周りはいくさんの人が知ってる?」

Aさん「はい」

川畑「どんな声があった？」

Aさん「辞退をする時？」

川畑「する時かした時か、わからんけど…」

Aさん「その辞退するって言った時に、自分の事をあまりよくないと言った仲間たちですか？」

川畑「じゃなくて、「お前の言う事わかるで」って言った人もいただろうし、他にどんな意見が？」

Aさん「そうですね、大学では僕と同じような学生が多くて、内定が決まったんですけど辞退してしまうっていう学生が多かったです。例えば、地元の、C君と仲いいんですけど。C君とかだと、仕事っていうのはある程度、文系とか自分のやりたいことが限られてくる。その中でどこに入っても最初は積み上げていくキャリアは同じようになっていくものなんで、どこに入っても一緒だからとりあえず内定持ってて、まだ就職活動続けるのもありやし、そこで就職活動がだめやってもその会社には入れるように…っていうようにやったらいいのと違うか、っていう風に言ってくれたんですけど。そういうことを言ってくれる仲間の方が多かったですね」

川畑「ちなみにそのことは、親御さんはご存じ？」

Aさん「そうですね、親とはあんまり相談しないんですよ」

川畑「そう。いや、親御さんご存じやったらどう言わはったかな、って」

Aさん「そうですね…多分好きにしたらいいん違うかって」

塾長「私ちょっと聞いててね。その…6ヶ月間で自分の将来の40年間を決められるか。そりゃ決められないとやっぱり思うよね。ビジネスの世界でもそうやけど…昔、例えば80年代とかは、10年先ってある程度見えてたかも

しれないけど、今10年先だって…いや、1年くらいは何とか見えるかもしれないけど、3年って言うと、何がどうなっていくのかわからない。そんなの、君じゃなくてもわからへんような気がする。そこまでを全部ある程度見通して何かを判断するということは、あんまり意味を持たない可能性もある。結婚もそう。結婚生活は、普通ももっと長い。会社は定年までっていう終点があるけど、結婚はもっと長い。そうすると、それを決断する、もうちょっと違う要素がひょっとしたらあるのかなと。「ここや！」とか、「この人についていきたい！」とか。そういうものがものすごく大事な気もするんやけど。さっきも話を聞く中で前提としてあったのが、「結構周りに流されて」とか。「とりあえずやっておかない」とか、そういうモードの中でっていう話もあったけど、何かこう…そういう感覚が、頭で考えて何か決めるという以外にあるのかな、っていう気がしたりするんやけどな」

Fさん「いいですか？何かこういう人生を歩きたいとかありますか？」

Aさん「はい、あの…不動産会社に就職しようとは最初は思ってたんです。その不動産関係の仕事をやって、その中で資格とか専門性を身につけたうえで次に自分で起業しようと考えてたんですけど。就職活動で迷っていく中で、そこさえも自分の中でぶれてきてしまって。本当に起業したいのかとか、そういうことを迷ってきてしましまして。今となってはふわふわしてきて、わからなくなってます」

Fさん「いいですか？僕ら、職場体験っていうのをやるんやけどね。皆さんもやってこられたと思うんやけど。職場体験で本当にあの子らに見てほしいのは何かって言ったらね、職業じゃないんですよ。職業を通して、人を見て

もらいたいなと最近思うんです。職業の先には必ずお客さんがいたり、人がいるんですよ。だから僕、職業っていうと、その先にある人とかね、それを考えてみろっていうのを、アドバイスとして伝えてるんです」

参加者からの様々な質問の後、今度は有名な某国立大学に通っているC君の話になります。C君は、おそらく就活においては勝ち組ということになるのでしょうか。比較的早期に、一流とされる会社の内定を手に入れていました。

Cさん「はい。僕は質問の方が時間取りそうなんです、軽くいきます。僕の就活のイメージは、初めは氷河期がどうか言っていたんで、ものすごく大変なつらいことなんだっていうのは聞いてましたんで、ちょっと怖かったです。でも自分の中に自信はあって。というのも、高校3年間、全部勉強に費やしたような環境でやってきたんで、大学は多分それなりに学歴で見たら評価されるようなところに行けたと自分では思ってるんですけど、まあ行けるんじゃないかなと。厳しい、辛いとは言っても、僕なら行けるんじゃないかな、そういう自信は持ってて。まあ実際、4月1日くらいから本格的に面接が始まるんですけど、4月3日に決まりましたんで、上手くいった方だとは思いますが。それでもやっぱりストレスは感じてたみたいで、しばらくご飯食べられなかった時とかもありましたし。それで決まって終わった時に、ものすごくいっぱい食べられたんですね。自信もあったけど、気づかないうちにストレスを感じてたんやって思ってた。でも決まってしまうと就活自体は僕すごく楽しかったと思ってま

して。それで就活のメリットみたいなのを今から話そうと思うんですけど。そのメリットを過去の部分、今の部分、未来の部分っていう風に分けさせてもらったんですけど。過去の部分に目を向けると、人生で今まで自分が何をしてきたか、どんなことを大事にしてきたか、何ができてできなくて、何が好きで嫌い、っていうのを見つめ直せるんじゃないかな、っていうのが一つ、就職活動のメリット。今という面に関しても、就活自体がすごく勉強になることだと思っていて。会社もいろんなところ調べますし、社会の事も勉強できて。まあ自分がどんな人なのかっていうのも自分で考えられますし、その過程で友人と語り合うことが多かったんで、僕の場合。友人の事ももっと知れるし、僕のことでも知らせて。自分でも自分の事を知れて、っていう。そういうことが現在のメリット。未来に向けては、これから何がしたいのかっていう人生の設計図みたいなものを描けたんじゃないかなっていうのが。それで僕は自分がこんなことやりたいって見つけられた気がしますし、今まで漠然としてたものを、面接で相手に伝えるために、凝縮してエッセンスをビシッと詰め込んだ文章で表せたり。そういうことが就活をして楽しかったな、メリットだなと思ったことで。で、その中でもやっぱり今の就活に問題があるなって感じてる部分があって。それはまず3つ言わせてもらおうと、まずいっぱい受けなければいけないことかなと。ゼミの先輩とかの話聞いてても、「俺50個受けたよ、とか。100個出したよ、とか。そういう人がいる中で、さすがに僕はどんなに自信があるって言っても、3つ受けたいところがあるから3つ出して3つ受かる」とかは思ってた。まあ30個は出す

かって決めて。まあ決まったんですけど、30個も出すと、本当に行きたいと思ってる会社じゃないところに行かないといけないわけじゃないですか。行きたくもないところにエントリーシート書いて、筆記試験受けて、面接も行って。すごい時間も取られますし、本当に行きたい会社に全部の意識を割けない。いっぱい受けて、その中から少ししか決まらないっていう今の制度はちょっと違うのかなって思うのと。まあ会社の名前を見て行ってる人が多いっていうのは、思う事があって。周りの人でもそうなんですけど、「何々っていう会社受ける」って言ったら、「その会社知ってる、すごいやん」とか。「何々受けてきて受かったよ」「それどこ、すごいんかわからへん」とか、僕もそうなんですけど、大きい会社であったり有名な会社であったり、会社の中身をあまり見てない人が多いんじゃないかなっていうのが今問題かなと思うし。もう一つ、会社側に問題があると思うのが、学生に対する扱いっていうのがすごい雑かなと思って。そりゃいっぱい受けてくれますし、その中から選んで取れるわけじゃないですか。まあ落とす人はどうでもいい、みたいな、そんな印象があるのかもしれないですけど。多いところは5次面接とか。知ってるだけで、13次面接まであったよっていうところもあって。13回面接を受けるわけじゃないですか。そのためにいろんな準備をしていく。だいたい今、4月1日から面接していいことになってると思うんですけど、4月1日に受けた面接は、4月1日の夜に電話がかかってきて、次来てねって言われて2日か3日に行く。それで例えば2日に行った時に、夜にまた電話がかかってきて、っていう。そうやって毎日毎日行くんですよ。で、受かった

らしいですけど、落ちた時に、受かったら1週間以内に連絡するよって言われてるんで、その日電話がかかってこなかったら落ちたことになるんですよ。で、1週間後くらいに残念でしたみたいなメールが来るんですよ。何のフィードバックもなくて。何もわからへんし、全部が否定されたような。そういう雑な扱いっていうのはあんまりよくないんじゃないかなって思いました。で、最後に気持ちの面で悩みというか。僕、〇〇証券に行くことになってるんですけど、証券会社ってすごくしんどいイメージが僕の周りの人にはあって。人気がないんですね、証券会社って。わりと受けたら行けるような。まあそんなことはないですけど、受かりやすいような会社なんですね。で、周りではすごい採用枠が小さい会社とか、給料がいい会社とか受かってる人がちやほやされてる中で、僕の会社そんなたいしてすごくもないよな、って。自分がやりたいことがあっていきたい会社であっても、周りから見たらあんまりちやほやされないような会社で、ほんとにいいんだらうかって。周りの人がいいって言ってくれるようなところに行けたんじゃないかと、思ったりしちゃうのが今の悩みやったりしますね。といったところです」

4月1日に就活を始めて3日には内定をもらったというC君。彼は自分の就活については最初から自信を持っているようでした。そしてその自信は、彼の学校の社会的な評価、その学歴、そしてもちろん、彼自身の今まで積み上げてきた経験から来るもののように感じられました。

C君は、就活のメリットを過去、現在、

そして未来という3つのフェーズに分けて考えていました。まず過去については、自分のこれまでの経験を整理できたことを挙げています。そして現在、就活によって社会のことをいろいろと調べる機会を手に入れ、知ることができたということ。そして未来については、自分のライフプランを立てることができたということを挙げていました。

そして最後に、就活の問題点を語ってくれました。一つ目は、エントリーする企業の数が多すぎるということ。そのため情報過多になる、あるいは時間に追われてしまう、ということでした。そして二つ目が、企業の学生に対する扱いについて。これはかなりの数のエントリーがあることによって、一人一人の学生が尊重されない可能性が出てくるということでした。そして最後は、周りからの情報によって自分の気持ちが揺らいでいくということ。この3点を挙げていました。

塾長「どうでしょう、いろいろ。聞いてみたいことがあれば」

Dさん「会社の名前だけ、っていうのはね。中身を見てないっていうところは、どうなんかなーって。自分自身も、何をやりたい、こんな風な達成感を味わいたい、っていうことがないのかな、って一瞬考えちゃいましたね。私は公務員志向だったので、民間には行ってません。公務員試験しか受けてない。その中で何をしたいかって言ったら、私生まれが〇〇で。その頃から何がしたいって言ったら、この地域どうなるんやろうっていうことを思ってたので、地域社会に何らかの形で役に立

ちたいなど。民間企業で役に立つっていう形もある。企業の中で社会的な責任を果たした中、社会が発展していくっていうこともあると思う。でも私は直接行政の中に入って、行政の中で地域おこしとかいろんなことをやりたいと思った。だからそこしか受けなかった。大学入った時からそう思ってたので、逆にそれしかやらなかった。皆さんが民間で苦勞されてるところっていうのは初めて聞かせてもらって、そうなんやって思ってるのが実態です。会社の名前だけ見て中身を見てないっていうのはよく分からないし、あまり理解できないなと思って聞いてました。正直なところ」

塾長「あの私、今の話聞いててちょっとだけ思うのは、50社とか100社とかエントリーシートを出して、要するに数をとりあえずある程度やらないといけない。自分もまあ30くらいはやらないとあかんとか。それで一つの会社についてどれくらいコミットできるかっていうのは、分母が多くなればなるほど、よくわからない世界になっていくんやろうなあと。そうやっているんなら面接が動いたりすると、けっこう情報がごっちゃになってくるし。さっきも言ったように、とにかくわけのわからない状態でとりあえず動いておかないと、っていう。そんな状況が多分リアルに存在するんやろうな」

Cさん「あるんでしょうね。ただ、行きたいからといって、絶対決まるかというところじゃない。お見合いみたいな。そういうイメージがあるんで」

塾長「私たちの同期とか、だいたい管理職の歳になってるんで、まあ人事担当とか。だいたい5分ほどしゃべったら、この人いけるかどうか分かるって言うね。企業からしたら、やっ

ぱり途中で辞めてしまう学生たちばかり採ったら会社つぶれてしまうからね。一人を一人前にするのに3年、だいたい研修代と給与、福利厚生にだいたい年に400万かかる。それで3年間に1000万払ってみんな辞めていったら、要するに会社の損失はめちゃくちゃ大きいので。だからある程度選ばないといけない…とした時の選ぶ目と、学生たちが「こうやったら就活がうまくいくのと違うか」っていうところに、ひょっとしたらずれが生じるのかもしれないですね。でも片一方で、大量の情報が舞い込んでくる状況にならざるを得ない。そこら辺の葛藤とか、そんなのがあるような気はするけど。そのあたりはどう思う？」

Cさん「うーん、採用の方法とかでも、今だいたい3年生の夏にインターンに行って、インターンで1週間なり一緒に仕事をした中で「こいついいな」って思った人を採る、インターン採用みたいななんかあるんですけど。そういうのすごくいいなと思って。それだったら働きたい人も1週間アピールする時間があるわけじゃないですか。その間に仕事とかを見て、一緒に時間を過ごす中で採用が来る。まあ時間はかかるだろうし、手間もかかると思うんですけど、まあ、今の採用よりもそういう採用ができればいいのかな、というのがありますね。でも一つも決まらないのは、不安なんですよ。だから僕が証券会社行こうと思ってるとしたら、主だった証券会社が5個あるんですけど、5個全部受けたら1個受かるんだろうか、とか。じゃあ受からなかったらどうしようっていう時、それで募集終わってる時あるんですね。もう募集終わりました、っていう会社がけっこう多いんですよ。で、僕も初めはけっこう行きたいところだけに絞っ

てたんですけど、途中で怖くて30に増やす時に、だいたいもう2次募集で出してくださいっていうような不利な状況でエントリーを出さされるんですよ。だからやっぱり、早い段階でたくさん出す、受けられる可能性のある母数を大きくしておくっていうのは、どうしてもしたくなってしまいますね。あまりいいことじゃなくても」

Fさん「ちょっと聞いていいですか？大学生生活楽しかったですか？」

Cさん「大学生生活はね、学校自体はあんまり楽しくなかったんですよ。僕高校もあんまり楽しくなくて。高校も本当に大学に行くための3年間。高校で遊んだというよりは、塾に行くことの方が多かったです。塾の方針で部活もやめましたし。それでもまあ、受かってみれば、受かってよかったなと思いますけど、ほかのこと…部活頑張ったり、自分の好きなことやってたりしてた人には、憧れというか、うらやましいなっていうのは思いますね。大学にしてもそうなんですけど。もっといろいろ楽しいことやってたらよかったなと」

Fさん「本当に大変やなと思うけど、僕が大学生だったら、僕は一体何のために大学行ってたんやろうって思ってしまう。僕、楽しかったんですよ。あそこでね、大学の仲間や先輩とガヤガヤした中でね、僕ちょっと変わったなと思うんですよ。研究したことも今でもよい思い出として残ってますし。今就活の話聞いていると、大学って何のためにあるんやろうって思ってしまうんですよ。だから、それだけ勉強頑張って、大学行かはずなのに。僕は本当に行ってよかった。でも…僕がこれから送り出す子がそういう形で進んでいくかって、話を聞いてました」

Cさん「多分勉強とかは楽しかったっていうのも

あると思うんですけど。でも僕の周りでは、何で〇〇大学行くのかっていうと、多分就職が楽だから。で、〇〇大学でどんな風に勉強したかっていうと、いかに楽に単位を取るか。いかに楽に卒業するか…に注力して、あまり勉強したいっていう意識が高い子はいないように思いますね。実際僕も、国際貿易を勉強してるって言いましたけど、ゼミが国際貿易っていう名前がついてるだけで、国際貿易の事全然知らないんですよ。そういう現状もあるのかな、と。やっぱり勉強して、大学楽しかったっていうのがいいな、うらやましいなと思いますね」

塾長「だからやっぱり、就活というものを通していろんなことが見えてくる、そういう気もするんですよ。そこに表現されているもの…それは例えば学校の課題もあるのかもわからへんし。いろんなことが…」

就活というものを通して、いろいろなことが見えてくる。それは確かにそうでしょう。若者たちにとってそれは試練であり、壁なのです。当然、今までを振り返って考えないと前に進めなくなるはず。C君に感心させられた点は、そんな試練を機会として捉えなおす視点をちゃんと持っていたことです。私なら、彼のそういった側面を高く評価するかもしれません。

そして最後に、Bさんに話してもらいます。彼女の就活は、他の二人とは少し違っているように見受けられます。彼女は、自分のやりたいことにこだわって就活に挑んだのです。

Bさん「えっと…私の就職活動は、他者との比較

との戦いでした。まず2回生の後期くらいから、皆資格を取ろうということで、学校で行なわれてる資格講座みたいなものに行き始めたり。3回生の始めからはみんな就活モードになっていろんなこと考え始めたり。皆ボランティアしたり、就活のための行動っていうものを取り始めていたなって、私は思うんですけども。私は3回生の時に入った、法社会学の医療過誤生命倫理を扱うゼミでの学習っていうものがすごく気に入って、大学に入って初めて勉強したいっていう風に思えたのが、3回生だったんです。で、真面目にそのゼミにも取り組みましたし、その研究自体がすごく面白くて、レポートなども深く研究して書かせていただいて…っていうことをしてる間に、夏になったら皆もうインターンに行って、冬になったら自己分析だの他己分析だの、就活の軸を決めるだの。就活本みたいな見本があって、皆そういったものに沿って、就活っていうひかれたレールに乗っていく中で、私自身勉強したいっていう思いがすごくその時はありまして。将来のことを考えていなかったわけではなくって、夢はあったんですけど。それについてやるよりも今は学業が面白くてそこに集中してしまっている自分がいて。12月、就活がヨーイドンって始まる時に考え始めたくらいはかなり乗り遅れた状況やったので、周りの人から大丈夫なん？って言われたり。そういう風に焦るようなコトバをかけられたりとかありまして。そろそろ考え始めないと、な、っていう風に、周りの勢いに押されて始まった就職活動でした。それこそ、50社とか100社とかエントリーするっていうのは、もうボタン一つでエントリーできてしまうっていう所があって。そういうものを押すだけで、そこからの

説明会とかの情報で自分のもとに送られてきて、という状況があって。とりあえず興味があれば押していこう、みたいな。普通にみんな100社エントリーしたよ、とか言ってる人もいたし、ボタン一つ押すだけでできることなんです。私は夢がありまして、普通の会社で働くっていうよりかは、私は夢を追いかけて、っていう思いがあって。最初はテレビ局を受けさせていただいてました。制作がしたいっていう思いがありまして。テレビ局って、他の方と業界が全然違うので就職活動のやり方も全然違って。まずエントリーシートっていうのがちょっと特殊で、作文があったり、ややこしい問題が3枚とか4枚あったり、っていうので。出すのが大変っていうのがあったものの3月くらいにそれを頑張って出したんですけど、ほとんど「お祈りメール」って言うんですけど、先ほど言わはった「健闘をお祈りいたします」っていうようなメールがどんどん来まして。そこで一度挫折を味わいました。紙一枚で何がわかるねんって思いながらも、そういう風に省かれていくことへの疎外感。社会から疎外されてるような気分だったり。自分を見てももらってないのに、そこにも到達できないつらさっていうのを味わいまして。そこから少し視野を広げて…でも私も結構な数、50社くらいはエントリーシートを出したと思います。で、決まったのは先週だったんですけど、3次選考4次選考に行っても落とされる、っていうことがずっと続いて、一旦エントリー企業がゼロになったのが5月の中旬、なんです。そこでゼロになった時に、私はここまで視野を広げてここまで業界を絞ってここまでこの仕事にこだわってやってきたことが、だめなことだったのかなってすごく思ったんです。で、あま

らめた方がいいのかな、向いてないのかな、ってすごく考えることがありまして。そこで諦められなかったんですね。諦められない気持ちが強かったんで、ここまで来たら就職浪人を考えよう、と思ひまして。単位を削って、来年もう1年、新卒で扱ってもらえるように5回生で学業を続けようかな、っていう気持ちを持って就活をやり直しました。それで、その5月に10社ほどエントリーシートを出させていただいて、先週面接に行かせていただいた企業に内定をいただいたんですけど。全く、周りの就職活動…、順番に面接を重ねて決まるっていうスタイルではなくって、たった一回の面接で、初対面の方に内定をいただきました。で、そういった企業に出会えたことっていうのは私にとってすごくありがたかったんですけど、まあ、今まで就職活動やってきたことも無意味だったとは思わないんですけど、そのシステム自体にやっぱり疑問を持つところは今でもあります。今は落ちているのでそんなになんですけど…、さっきC君が言った様に、皆に知られてる企業でもなければ、お給料は東京で生活しているギリギリのラインっていうことで。私は夢を追いかけてたっていうことがあるので、それでも全然大丈夫なんですけど、やっぱり親だったり周りの方がそれって大丈夫なの、って心配される方が多いんですけど、私の中ではすごく納得できる就職だと思っています。以上です」

Bさんの就活は「他者との比較との戦い」だったと言います。これは、他者との比較で翻弄されそうになっていく自分との戦いと言い換えてもいいかもしれません。Bさんによれば、2回生の後期頃から、大学で

資格講座が始まったり、みんなが就活における自己アピールの材料としてボランティア活動に参加したりと、就活モードがスタートすると言います。そして3回生の夏にはインターンシップが始まり、後期からは自己分析やキャリアプランなどのセミナーに参加し、やがて就活が始まっていくそうです。

しかし、Bさんはそんな流れに逆らうかのような学生生活を過ごします。3回生の時に所属したゼミでの学習がおもしろく、そこに没頭していくのです。すると他のみんなの就職モードからは取り残されることになり、まさに葛藤を抱えていきます。それを彼女は「戦い」と呼んだのでしょう。

3回生の冬から就活が始まり、50社から100社にボタン1つでエントリーし、エントリーシートを提出。そしてそこからの面接の嵐と、次々にやって来る不採用の「お祈りメール」。彼女はそんな渦のような就活のモードに片足をつけながら、その一方で、テレビの制作がしたいという夢を追いかけていくのです。しかしそれは決してたやすい道ではなかったようです。

塾長「どうですか？」

Mさん「渦中にいらっしゃる方の話なんでね、大変。大変なんだけど、Cさんがおっしゃったようにね、よかった点っていうのを認めていらっしゃるのすごいいいなと思いました。システムにはものすごい不備があるんですよ。で、エントリーができないようにする…あんまりたくさんすると、会社にとっても大変なので、っていう動きがあるんでしょう、

少しずつ修正をしていくでしょうし。で、いくらか大学生にとっても求人倍率とかはよくなってはいるんでしょうけど。問題は残された人、みたいな。やっぱり、さっきおっしゃったように40年後を見通すっていうのは無理やっていうことに尽きるかな、と。あんまり自分に向いてる職種とかが、40年間絶対ブレないっていうことはあまりないと思うから…、もうちょっと柔軟に対応できるように。変化する必要性がありますよね」

塾長「私たちは84年に卒業して、それこそ証券ブームやった。〇〇証券とか言ったらもうものすごかった。びっくりするくらい給料もらってた。だからもう30歳くらいで年収1000万とか普通やった。でもすぐつぶれて、その後、金融関係では銀行も統合やら何とかで…、もう悲惨な結末でした。だからそれこそね、40年先なんか見えないです」

Mさん「私ちょうど海外に行った時に、周りで証券会社の人とか銀行の人とか、月40万の社宅に住むとか。でもつぶれたら帰るところがないみたいな。本当に知ってる人がそういう状況だったんで。でも皆、やりたいことが…職種とかに関係なく、ああいう働き方をしたいとか。そういうのがはっきりしてる人は、それも得難い経験だ、みたいな感じで帰っていく人もいます」

Fさん「40年先なんか見えないですよ。僕が教師になった時に、〇〇(大手IT関連企業名)なんて大した会社と違いましたよ。そんな時代です。ゲーム会社なんて、ほんまに不安定な仕事やって言われた。どうなるかわからへん。でも今はもうITを抜きに動かないですよ。90年代くらいからじゃないですか。インターネット絡みの。僕が採用された時華やかやった企業が、どれだけが残ってるかという

ことですよ。あのままの輝きを持ってどれだけが残ってるか。あの時に何も考えてなかった企業が、姿すらなかった企業がどれほど出てきているか。そういうところは、40年先じゃなくても、そう思いますわ。で、後は入ってからどうキャリアアップしていくか。こないだのキャリアの話聞いてると難しいんやけど、やっぱりスタートなんですよ、まだまだね。それから人は変わるし。目指すものもあるやろうし。その中で作り上げるものやと思いますわ」

川畑「一つ思うのは、40年も見通せないということ、歳を取った者はわかってたり、あるいは感性的にそう思ってるから。逆に、ちゃんと安定したところへ入れとかね。逆にそういうことを歳のいった者が求めるといふかプレッシャーを与えるといふかね。親もそうやし、いわゆる大学側もそうやし。みたいなところがあるのかな、と」

Cさん「そうですね。親にもやっぱり、「大丈夫なん、証券会社。あんた続けられるの」とかすごい言われて。あんまり賛成してる感じじゃなかったですね。もっとほかのところを受けてる時に「そこいいやん、頑張れ」って言ってもらったのに、実際証券会社に決まった時に「次どこ受けるの？」みたいな。友達もそうなんですけど、「何々受かったで」「そうなん、それどこなん？」って聞かれるような。僕は行きたい会社に受かってよかったのに、その人の正直からしたらそれは第一志望になり得ないような会社だということもあると思うんですね。そういうこともあって、周りの人がすごいって言うような会社に行ったらもっと気が楽やったのかなって思う要因にもなってます」

40年先が見渡せた時代と、来年のことさえよくわからない時代。その違いはとて大きいように思います。会社が自分自身の40年を保証してくれる根拠が崩れつつあるのです。今の大学生たちは、そんな不透明な未来に対して何かを決定していかなければならいのです。

川畑「社会福祉施設で働きたいと思う学生がいて、雇ってもらえるように、頑張るんですよ。ところが、親御さんから、あんたそれで一生いけると思ってるの、って言われて。あの、親から言われたっていうのを書く人がいるんですね。僕はそのつもりだったけど親がだめと言うのでやめますと。というのは一人じゃなくてやっぱりあるんですね」

塾長「そうですね」

川畑「僕は、就職させたいんやけどね」

塾長「親がやめておけと」

Nさん「保護者の方は社会福祉施設に人材を、全然送ってきてくれはりません」

川畑「きつい、汚い、給料が安いということだね。全部そうだと世間は思ってるところがあるから。そう言われたら、「それでも僕は行くんだ」と思うまでのいろんなものを持ってなかったり、知識もないからね。そう言われたら「そうかもしれへんし困るな」ということで、違うところを選ぶという」

Dさん「福祉業界のところはね、やっぱり親や周りの影響もあって、福祉系の学生が志望しない。そこに志向が向いてないんですよ。〇〇大学の先生なんかと話をしていると、〇〇に入りたい、っていうところが出発点で、学部はどこでもいい、みたいな話まで出てくるから。で、じゃあやりたいもの、目指すものって何なんだろうな、って思っていました。ただ、

福祉ってやりがいあるよというところをどう見てもらえるか、わかってもらえるか。福祉の分野のやりがいってどんなもんなのかって、こういうとこなのか、って知ってもらうためにいろんなことをやりましたけど、なかなか上手くいかない。それと、福祉の中だったら、キャリアアップとか、そういうところが難しいんじゃないかっていうような。人を育てなくて、離職率が高いっていうところがあったので、じゃあまあ皆で、業界全体で育てるってことをやっていけないかなあ、って。そんなことをどうやってやっていくか考えながらやってたっていうのが現実ですよ

Bさん「大学でも、キャリアオフィスっていうところからずっと電話がかかってきて。進路はどうなっていますかと。内定は出ていますか、っていう電話が毎月毎月かかってくるんですね。で、こういう説明会が大学でありますよ、こういう講座が大学であります、〇〇大学の子が入れる特殊な面接があります、だったりっていう、そういう情報を大学が言ってきたりとか。なんか就職活動っていうものが、その大学のシステムの中に含まれているっていう。先ほどの教員の、受かりやすい、っていうものも、大学もその結果が全てで、それが次の入学者につながるっていう。教育っていうものじゃなく…そういう社会になってるのかなって」

Oさん「〇〇大学だったら、卒業してから一年間も連絡がすごかったんですよ」

Bさん「あ、そうなんですか？」

Oさん「僕とか、内定もらってたところがあったのにフリーターをしたんですけど。言うのも面倒くさいし、何で言わないといけないんだろうと思って黙ってたんですけど、ずーっと

電話がかかってきて。で、実家にも電話がかかってきてるよ、っていう話になって。大学に、それこそ何か、すごく変な営業会社みたいなのがあって。学校の売り方っていうのもやっぱり、就職率がいいですよっていう言い方は説明会でもしてる。この前、大学院の説明会でしゃべるように言われて行った時も、どういう就職を考えてるかとか、研究科で何ができそうかっていうのも言ってほしいって言われて。でもそもそも大学院の説明会は、大学院の事を知りたいと思って来てる子たちよりも、就職で迷ってる子、ダメだった子も来るから、そういう子も大丈夫っていう感じで言って、って言われて。いや、フリーターでしたって言いますけどいいですか、って。で、言ったんですね。その辺がちょっと迷わせてるところが実際あるなっていうのはすごくあります」

川畑「うちの大学なんか、とにかく満足度100%の大学です、っていうのをね、新聞に大広告出してね」

塾長「見た見た」

川畑「ああいうところでイコール就職率100%みたいな。上がバーツと号令かけて。それでもカリキュラムも含めてトップダウンです。学部には、いろんな学生がいるから、それはおかしいって言うんだけど、そんなの全然相手にしてもらえませんか。それはどこをとってもそうやと思いますよ。特に私立大学では」

Dさん「でも先生。その仕事をやってる時に、大学の事務の方々ともお話をしたんですけど。やっぱり、大学の方に定員ありますよね。定員割れを起こさないようにしようって思ったら、最後のところはやっぱり就職率を言われるって」

川畑「親御さんも、やっぱり就職率のいい大学に

息子、娘を入れようっていうのはかなりあるから」

Dさん「それはものすごく言ってます。だから就職してるかどうかの確認メールとか、そんなのが入るっていうのは、そういうことなのかなと」

ここでは、学生たちの親、そして学校側の視点が議論が上がってきます。親はやはり40年先を見ていろいろと言ってくるようです。しかし、親が想定している40年後は、ほとんど幻想に過ぎなくなっているのかもしれない。それでも親はその幻想を信じ、子どもにいろいろと口を出すのです。

それに対して学校も、学生たちの就労について口出しをしてきます。その理由は、就労実績が学校の人気に直結するからです。従ってBさんの話にあったように、学生たちの就労を支援するようなプログラムが次から次へと用意されていくのです。

Fさん「最後に一つだけ。40年っていう話で。ある民間の人と飲んだ時にね、今のような話が出たんですよ。40年後この会社どうなってるやろう、とか。その時に飲んだ人が、「こいつら、40年後でもこの会社をわしが背負ってるっていう気概がない」っていうのは常に言ってましたね。「他から40年間続けてもらって、私は乗っかってる。それはあかんやろう」と。そういうことをずいぶん言っていましたね。要するに、例え他がだめになっても、自分が背負ってるんやと。40年経っても、俺がこの企業を背負ってると。それくらいの気概が、実はわしは欲しいんや、と。皆大丈夫ですかね？って言うんじゃないくて、お前この

会社の社員と違うんか。お前誰なんや、というよな。そんな感じ。誰かがまとめてくれて、それに乗ってるだけ。それではうちの会社はだめやって言って。その頃にはわしはいないけどな、って言ってがーっと飲んでましたけど。40年を見る時には、ほんまに自分がその時に背負って、絶対大丈夫やって言えるくらいの気概が欲しい、っていうことは言ってましたね。少なくとも、わしはそのつもりで今までやってきた、って言ってました。人が守ってくれるのと違う。俺が守るんやと」

川畑「そういう意味で言えばほら、誰もが知ってる会社じゃなくて…って言ってたけど。でも誰もが知ってる有名どころに入る気分と、知らんところに入る気分とは当然違うわけやん。で、違う中にもね、今おっしゃったよな…僕が誰でも知ってる会社にするんだ、みたいなところが刺激されることはあるわね」

Cさん「そうですね。今聞いてて頑張りたくなって思いましたね。ただ、僕の会社はわりと誰でも知ってます。でも、自分はそのから抜け出せなかったです。やりたいことできる会社って思っても、やりたいことができる誰でも知ってる会社…からは抜けきれなかったです」

川畑「うん、そういう意味では、誰にも知られてない会社って言うのは神様からのプレゼントかもしれない」

Bさん「面接で社長に、あなたが歯車になってください、って言われたんです。うちの会社の歯車になってくださいと。それ言われた時に、ああ頑張ろうってすごい思えたので、そういうことなのかな、と少し思います」

塾長「…3人の方、ありがとうございました。F先生の最後のお話の中から…主体の喪失って、

けっこうキーワードになってる気がするんで。自分自身がだんだんわからなくなっていたりとか。ただ3人の話を聞いてると、この就活っていうのは、自分を見つめる機会に結構なってることは間違いないような気がする。こんなでもなかったら、大学時代はあっという間に終わってしまうような。だからそういう意味合いっていうのはすごくあるのかなと。ただ、いろいろお話を聞いて、大学も含めてやっぱり商業モードで動いてるので。ここにちょっと持ってきたのは、『僕は君たちに武器を配りたい』っていう、要するに、学生があまりにも丸腰になってしまっていて、就活を応援するようなビジネスって今いっぱいある。もうその餌食になってる。また、大学の餌食にもなっていると。企業も、言ったら、もう辞める人間は想定して採る。こういう仕事はそいつらに任したらいいと。その餌食になると。今の学生があまりに丸腰なんで、それで武器を配りたいっていう過激なタイトルなんやけど、結構面白いなっていう風に思ったり。だから、何か今の社会の渦の中で、学生たちもあつぷあつぷしながら。でも片一方で、その中で自分とは何だとか、友達同士でいろんな議論が実は就活を巡って行われてたりとか。私たちの時は怪しい喫茶店とか結構あって。夜な夜なそんなところでいろいろ哲学を語ったり、そういう文化があった。それが就活になってるのかな、とか。まあそんなことをまた材料にしながら後半お話をしたいと思います」

前半のセッションを私は、「主体」の問題で締めくくろうとしていました。ジャン・ボードリアールは消費社会における主体喪失の問題を訴えました。消費化が進んだ社

会では、消費者は自分の意志で商品を買っているように見えて、実は買わされてしまっている。そこでは消費者の主体があいまいになっていく、といった様をボードリアールは指摘するのです。これを就活という場面で考えてみると、大量の情報の渦の中で、企業の意図、大学の意図、あるいは親の意図の狭間で揺れながら、学生たちの主体が次第にそぎ落とされていくように感じるのです。5年先が見えない時代において、主体が喪失されていくという状況が果たして何をもたらすのか？そこには社会そのものの脆弱化が見えてくるような気がするのです。

川畑「では、後半に入りたいと思います。Pさん、どうでしたか、お話を聞いて。年齢の近いこともあるし、触発されて何か言いたいこともあるでしょうし」

Pさん「僕、今は〇〇大学に行ってるんですけど、前は〇〇大学で…まあ就職率で言えばあんまりよろしくないところに行ってたんですけど。言われたことは、今から半年あるんだから、ボランティアに行ってネタを作れと。そういうのでボランティアに行った人が僕の周りでもすごいいたんですね」

川畑「ボランティアと違うやん、それね」

Pさん「ネタ作りのために。それがだんだん下の回生にも波及していった。1回生のうちからネタを念頭に置いたうえで活動するっていうのも今あるみたいです」

Oさん「そうですね。学生の3人の話を聞いて、皆さん共通してたのは「他者」っていうコトバが出てくる。周りの人たちっていうのが出てきたり、ほかの人っていう目が出てくる。その他者っていうのが何を思って言ってる

んだらうな。家族も、先が心配っていう思いはわかるけれども、やっぱり最後には社会的な背景とかもあるのかなっていう。3人ともみんな違う話ではあったけれども、構造的に見るんじゃなくて、個人として見たら、悩んでるっていうのは僕も思ったんですよ。決まらない決まらないっていうのがある中で、決まることがゴールじゃないと思うんですよ。決まらない、とか内定を蹴ったっていう決断自体もすごく大きな決断だと思うし。先の心配をする必要はないんだぞっていう声もあるかもしれないけど、やっぱり内定を蹴ったっていう思いもすごく大事な一つの決断なのかな、ってすごく思いました。その中で、やりたいっていう思いがあって、周りとはちょっと違っても決めたっていう話においては、入った後、やりたいって思ってたこととちょっと違うなっていうことがあっても何とかやっていって、何とかやってる自分を認めてもらえるような社会があったらいいなって思うし。若い世代も、それを意識して皆で何とかしていくっていうのを…すごくその機能が落ちてきてると思うんで、そこが強く作っていかれたらいいのかなっていうのは思いました。で、一番違うパターンで決まってるっていう話では、そうやって別枠で動いてる社会もあるんだと思うし、やっぱりそういった会社がどうやって残っていくのか。何を大事にしてそういう就職活動の仕方を残していつてのかっていうのは、僕の中ではすごく関心がありました。もう一つは、エントリーシートをボタン一つで押したら何とかなるっていう話においては、ボタン一つでダメだ、僕っていう人間がわかるのか、っていうことは、案外僕らは受験でも経験してるはずなんですよ。顔を知らないで、紙切

れ一枚で落ちる、受かる、っていう経験は就職で始まった事じゃなくって、実際学生のうちに、多い人だと3回くらいは経験してるんですよ。でも実際大人になってくると、なぜか就職っていうのがゴールになってしまう。で、僕はフリーターっていう選択を採ったからこそ見えるのが、何とか食っていこうっていう方法はいくらでもあるし、一回就職しようって思ったら、その切り口は昔よりすごく便利なんですよ。インターネットで調べればどれだけでも出てくるし、募集してますよっていう会社もすごくたくさんあって。なんならハローワークに行けば山ほど仕事があったりとか。その辺を考えると、本当に大学生がなんでこんなに焦らされたりとか、勉強したいって思って入ってないにしても、きっかけはたくさんあるのに勉強しなくて済む環境があったりとか。やっぱり大学っていう所に入ってしまうと、今しなきゃいけないことがすごくばんやりしていて、しなきゃいけないこととしたいことっていうのが混在している中で、期限が来たらやらなきゃ焦ってしまう。となると、本来の2~3年間の大学生活の意味って何だったんだらう、って思うと、気持ちの中で空中分解しやすくなるのかな、って感じさせられました。僕もM2なので、博士課程まで行くのか就職するのか、どうするんだ、っていう問いは自分の中にもあるんです。なんだかんだ言っても年齢が年齢まで来てますから、幅も狭まってる歳だと思うんですよ。大学生活すると。そうすると、今やらなきゃいけないことが選べなくなるんですよ。だからある意味ラッキーで、その中から迷わなくても、今自分にできることをコツコツやっていって、それが何か自分のやりたい、やれる、っていうこととやりたいって

ということが自分の中で分かっていく過程が、今一つ一つ積み重ねていく中で見えてくるのかな、と思って模索はしてるんですけど。すごくいい話を聞かせていただいたな、と思いました。長々と失礼しました。以上です」

塾長「私、今話を聞いてて非常になるほどな、と思いました。3人の話の中で、結構不安に支配されてる、っていう側面がある。私たちよく言うんやけど、不安で子育てすると厄介なことになったりする。不安の対極にあるのは希望かもしれないし、夢かもしれない。さっき夢って出てきたけど。だからそれが葛藤状態にあって。でもその不安って結構得体がしれないから、それに支配され、苛まれていく。だから一旦そういうものを吹っ切ったら、実は全然違う世界が見えてくるのかなって思ったりする。その不安を作り出してるのは例えば今の社会なのかもしれないし、学校なのかもしれないし、皆の動き方なのかもしれない。そういうものを通過してみると何か見えてくるのかもしれないなど。それとも一つ、わりとつい最近まで私自身が大学院に行っていて、学部の時もそうでしたけど大学院に行った時にも先生との出会いって大きかったように思います。大学ってやっぱり出会いやなど。この人やと思える人に出会えるかどうか。だから就活っていうのも、出会えるかどうかみたいな。そういう出会いっていうものがすごく大事な気がしてて。でも出会うためには、結構自分自身のことについてもいろんなことを考えてないと、出会えない。なんかすれ違ってるだけとかになってしまう。だから出会いなんやろなと思う。結婚とかも出会いなんやろうなと思ったりするんやけど。いろんなことが出会い。ビジネスでも、この人と何か一緒にやれる、とか。それ

もひよっとしたら出会いかもわからへんし。子どもの支援とかでも、この時にこういう人がまさにくれることで何らかのケースが大きく動く事っていっぱいありますよね。出会うことになってるんだ、とか、後になってなるほどなって気付く事とかって結構あるような気がしてて。何かそういうファクターが、今の就活っていうものからなくなっているように…」

川畑「余裕がなくなってる、みたいなね」

塾長「そうそう。何そんなこと言ってるの、みたいな話になるのかもわからんけど。そんな気もするんですよ、今話を聞いてると。だからいろいろ不安に苛まれてる状況も、そういうものが取り除かれると案外ふっと見えてくる。でもそれに支配されてるとそれが全然見えない。あともう一つ思ったのが、自分の子どもが予備校に行ってた。予備校も独特の文化の中で。予備校の〇〇大クラスとかに入ってる人間って、だいたい有名私大とかを蹴って入ってる人間やから、こんなところ、どうしようもない大学や、みたいな。ものすごく歪な形の視野っていうのが確実にあるなって。その、受験生から見えてる大学の世界と、大学に入った人間から見えてる大学の世界っていうのは随分違う気がしてて。それは企業も同じで。就活の渦中にいる人が見ると…会社の管理職だったら、新入社員どうするんやと。この人はいけるな、どうかな、っていう視点は随分違うなど。そこら辺のズレみたいなのも、ものすごくあるような気がする。そんなことをどどんと思いましたね」

Dさん「あの…今の人事担当者とかね。違うなっていうのはその通りやと思うんですよ。だって人材っていうのは、企業にとって会社動かしていくために重要なファクターですね。シ

システムがあっても人がいないと動かないの
で。人を育てるっていう…さっき400万って
いうお話も出てましたけど、企業にとって人
に投資するっていうのは非常に大きな買い
物です。それと、一生懸命企業が採用活動す
るっていうのは、企業が何とか永続的にやっ
ていくために人を採用してるわけなので。そ
この部分、採用する側の視点と受ける側の視
点っていうのは、やっぱりズレがある。どう
してもそれはズレざるを得ないと思う。必然
だと思います。だからミスマッチも起こるし。
で、違うって言って辞めていく人たちも出る
し。私のやりたいことはこれじゃないって辞
めていく人たちもいるし。っていう風に、私
は思ってます」

Mさん「大企業の方が離職は多いんですね？」

Dさん「多いです」

Mさん「やはり、自分がこれやりたいと思っても
いろんな仕事があるからどこに回されるか
分からないし、たまたまいい上司と巡り合っ
てもたくさんの人の人事異動は仕様がな
いからです」

Dさん「おっしゃる通りですよ。人事異動があ
ったら転職してるような世界です。今までの
仕事と全然違うことを次の年はやったりと
か。でもそれを経験することによって自分自
身が成長できるっていう風には感じられたら、
自分自身の達成感もあるし。育てられてるっ
ていう意識を持つとそこところは全然違
うので。そういう感覚が持てるかどうかって
いうのが、入ってからの世界では大きいかな
と。さっきおっしゃってたように、正社員
の世界。だから私が今の立場になって考えて
るのは、やらされてる感じで仕事をしてほしく
ないなど。自ら前向きにやりがいを感じても
らうにはどうしたらいいのか、っていうこ

とを今の立場になって考えてる。そういう立
場なので、今就活の中でいろいろと自分自身
を振り返った事の中から何を見つけていく
か、っていうのが一方であるんじゃないかな
あと。自分自身やりたいものとか目的意識
とか、自分がこうありたいという将来像と
か。そういうのをその中で見つけていくのか
なという気がする」

「不安に支配された就活」、「出会い」、そ
して「エントリーする側と雇用する側との
視点の違い」。これらのコトバが、ここでの
キーワードなのかもしれません。

人間は不安に支配されてしまうと、自己
保身が機能しはじめ、何事も既存のフレ
ームの中でしか考えなくなってしまいます。
そうすると新しい出会いが生まれなくなり、
新しい可能性を手に入れにくくなります。
すると再び不安が高くなり、自己保身に回
る、というループに陥っていくように思
うのです。そして結果的にこのことが、エン
トリーする側である学生たちと、雇用する
側である企業側との視点の違いを生じさせ、
新たな就活の困難を生んでしまうように思
うのです。多くの大学生たちが、不安に支
配される形で就活を行うことのリスクはこ
んなところにあるのではないのでしょうか。

川畑「就活、キャリアについてっていうこともあ
るし。その事を通して何かを見つけ出すっ
ていうこともあるわけですけど。後の方がいい
ですか」

Aさん「そうですね、Oさんの5年間についても
っと詳しく聞きたいですね。僕にはその選択
肢はなかったんで」

Oさん「どこから話したらいい…」

Aさん「僕は、Oさんが、5年間フリーターやったという経緯…というか、なぜ…」

Bさん「スタートのところ、その中でどういう経験をしてどういうことを考えて…みたいなの」

Oさん「元々は、皆と同じようにこうしたいなっと思う事があって。でも就活する時期が来たな、皆も動き始めたな、説明会が始まったな、と。で、何をしたかったかっていうと、今大学院に行ってるように、研究がしたいってすごく思ってた。でも実際大学がすごい楽しかったって言われると、大学での勉強が楽しかったとは言い切れない。授業も行っていない、授業の履修は同じ専攻の人のを真似して書けば、福祉専攻だったから、全部それで単位が埋まってしまうようにセットされてる。一般教養もそんな感じ。AO入試で入ってるから、元々その、産業社会学部の人間福祉学科に関心があって入ってるけれども、中を見ると、資格を取るための授業しかない。それで全部が埋まってしまう。で、あんまり面白いと自分で思っていないし、元々学校の教室に入っているのが全然好きなタイプじゃなかったから、大教室になればなるほど、ここで何を聞いて、それを感じたものをどう出したらいいんだろうっていうのを思いながら、授業もあんまり行かなくてもよさそうやし、まあいいかって思って。まあまあ皆に授業の事を教えてもらって。学校の外で皆を待つっていうことを繰り返してました。で、意外と、もしかしたら大学にこだわってるから面白くないのかもしれないぞ、と思い始めて、大学の時からバイトばかりし始めて。その時に訪問販売の営業のバイトをして。もう8時間ガッツリ入る。それでだんだん認めてもらえるようになってきて。それで出張があるから

行くかって言われてついていって。やっていったら楽しいし、座学だけの学びじゃないところがたくさんあるんじゃないのかな。大学で知ってることだけじゃ、社会で上手くいくわけじゃないかもしれないし。で、就職も決まったけれども、じゃあ研究したいっていう所もあるのに、お金貯まったら辞めますけどお願いします、って言って入るのも何かおかしいな、っていう自分の中の葛藤があって。そしたらお金を稼ぐっていうのと働いてっていうのは一緒のようで違うかもしれないなと。正社員で働くのとアルバイトとどう違うんだろうと。辞めるって決まってるんだったら、じゃあフリーターしてみようかな、ということで内定を断って、フリーターを選択する。ちょうどその時に知ってる人が東京にいて、せっかく「フリー」って付いてる「フリーター」っていうんだったら、京都にいなくてもいい。じゃあ地元は福岡だけれども、敢えて東京に、っていうので。求人誌がインターネットで見られるから、時給がいいじゃないかっていうので東京に行って。友達の家と一緒に住みながら生活していくので、まずラーメン屋のバイトを始めて。それが2年間ちょっとかな。ラーメン屋をしていく中でも皆と一緒に何かをやり遂げていく。チームプレーがすごい大事な…忙しい時間になると、誰かが欠けたら絶対に誰かが補わなきゃいけないし、効率化も目指さなきゃいけないけど効率化を目指したらお客さんの満足度が下がって、お客さん減ったりした時期があって。じゃあそれどうするってなった時に、先輩が入ってきたら新人研修からバイトで考えなきゃいけないよね、社員は何もしないから。ってすると、じゃあ本当に就職した時に、社員ってボーナスもらってるのに働かない、何

だこれ、みたいな。飲食店とか明確に出やすくて。経理をしなきゃいけないとかなんだとすると、絶対現場を見るのはバイトだったりする。そういう声を上げてみたりしながら、働く面白さっていうのは正社員じゃなくても味わえるのは、地道に今一つ一つ起こったことに対して何とかしていったりとか、自分のできることを身につけていくことが大事なのかなって思い始め。でもそれから、手首を怪我したっていうのがあって、ラーメン屋を辞めて、今度はテレアポの仕事始めて。インターネットの光回線の電話、よく来ませんか？鬱陶しいやつですよ。僕嫌いなんですけど、敢て嫌いなところに行っただけです。そしたら意外とそこでは社員研修と一緒に、本当に会社の概要から商材の説明まできっちり一週間ずつやって、次の1ヶ月間で研修をやって、ずっとバイトだけど社員と同じように研修がある。いざ電話をします。どんどん切られてダメージ来て、自分って何でこんな仕事してるんだろうって思うけど、そこで辞めたら自分の選択を諦めたっていう風になるのは悔しいから、まずは自分で一件受注しようと思って。取り始めたらそれがコンサルタントにいつてしまっ。それが皆がまたいろいろアドバイスしてくれたり、そんなに頑張るんだったらトップアポインターを横に置くからその人から盗んで覚えていけ、っていう風に環境が整い始めて、結局取れるようになったんですよ。そうすると、バイトじゃもったいないなって思うけど、その業界はバイトも社員も給料のボーナスの設定が違って、バイトでもトップアポインターとかになると50万くらいもらえたりする。社員ってじゃあ、お金とか給料の設定でもないんだったら何なんやろうって思いながら。まあお

金も貯まったし大学院の受験でもしよう、っていう所まで来てたところで、今度大学の時のゼミの先生との再会があって。NPOの契約社員が滋賀であるから来ないかって言ってもらって、NPOに入って。それが子どもの虐待防止の教材、学習資料の作成を小学校の低学年生用と中学生用を作るっていうのがあって。9ヶ月で。それ滋賀県からの委託事業だったんですけど。その中でそれを作り上げてちょうど大学院も受かったんで契約も終わって、っていうような流れです。だいぶ長いんですけど」

Qさん「ちょっといいですか？それにすごく共感してしまうんやけど。僕最近仕事しててね、すごくひっかかっているのが規範っていうコトバなんです。ルールっていう意味ですけどね。それに僕ら縛られるし、翻弄される。っていうことかな。今で言うと規範への挑戦なのかなっていう感じなんやけど。僕もフリーターやったんですよ。大学卒業したら2年フリーターをして。Dさんと違って、僕の場合は、最初から公務員目指したわけじゃなくて。皆から総スカンを食らわせられそうやけど、たまたま公務員になったんですね。ここまでよくやってきたなと思いますけれど、たまたまいるだけで。ひょっとしたらまたここから抜ける可能性もある。だから40年どころか来年、再来年の事も考えちゃいない、っていう感じなんやけども…。もっとほかにバイトしてるでしょ？してないですか」

Oさん「ラーメン屋は2回、テレアポの場所が2回変わってます。あと大学の時のバイトは居酒屋とかはあります」

Qさん「僕は着ぐるみかぶったりとか」

Oさん「それNPOでした、僕」

Qさん「そうそう。着ぐるみの場合は、15分やっ

て15分休憩しなさいと言われるんだけど、あえてどこまで挑戦できるかやってみたりとか。いろんなことをするわけですよ。派遣とかでもいろんなことやって。〇〇の社員に成りすましてくださいとか言われるんですよ。成りすまして、お中元の見本を並べる仕事、5分で終わるんだけど、それで8千円とか。ただしそれには条件があって、社員に見えないといけないという妙な条件があって。何でかわからないけど、「これはQ君にしかできない」って言われるわけですよ。とりあえず行って3件こなしたら一日で2万4千円。とか、いろいろやってる中で、自分でもよく分からないようになってきてますね。大学の時に就活を皆がやってる中で、自分が一般で働いてる姿がどうしてもイメージできなくて。今から考えると営業とか向いてるかもしれないかと思うんだけど、それは今だから思うことであって。昔はそう思えなかったんですね。だから皆が就活してる時に、就職説明会に一日だけ行ったんですよ。就職活動はこうするんですよ、って。もうそこで僕外れちゃって。完全にやる気なくしちゃって。で、フリーターやろうと。フリーターのフリーはってという話出たじゃないですか。僕の場合はフリーターって自由に働くものやと思ってたから、休みなしでがっちり働いてやろうと思って、週一回も休みなしでバイト3つ4つかけもちして。そしたら手取りの給料今より良かったりして。でもそのうち何か気づき始めて。このまま続くはずがないと思い始めて。で、元々自分が臨床心理士目指してたな、っていう事を思い出して。ちょっとでも臨床心理士ではないな、と思いだして、精神保健福祉士っていうことで専門学校に入って資格取って「たまたま」京都府に入ったん

です。だって、京都府の応募を2週間前に知ったんですね。募集締め切りの前日に先生に教えてもらった。「Q君、京都府募集してるで」と。いつまでですかって言ったら、明日締切って言われて。明日締切って、今から間に合うの、みたいな感じで。とりあえず卒業証明書も手元にあるはずもないし、明日取りに行ってその足で行こうか、みたいな。そこから皆が専門学校とかで公務員試験の勉強とかしてきてるわけじゃないですか。僕公務員試験の勉強って何、とか思ってたから、とりあえず本屋さんに行って過去問やってみようと思ったら、めっちゃ並んでることにその時初めて気が付いて。これは買う意味もないと思って、買わなかった。もういいや、試験まで2週間遊び倒してやれ、と思って。そこで当日全然分からない中で、とりあえず選択式だったから、真ん中に丸付けとけばいいや、みたいな流れでまかり通った、というところが。まあこんな裏話ですけど。そんな自分の短い人生ですけど、思い返してみるとそんなことがあったなと。さっきの塾長先生の話であったように、人との出会いって大事っていうのはすごく思うんですね。大学の頃に、僕塾を始めて。大学生で塾の経営者っていうのをやってたんですけど、その当時理解ある塾長がいて、まず僕が塾講師として入って。で、Q君に任すわ、とってその人は違う事をするからって言って去って行って。何をされるのかな、と思ってたらヨット販売とか始めはって。何やこの人、とか思いながら。それももう10年以上経って久々に再開して飲んだりとか。そういうこともあったり。だから、僕は昔思ってたんです。自分が目指してた人って、自分が話してて面白い人になりたいと。だから学校の先生とかでも、しゃべっ

てて面白い先生と面白くない先生がいる。僕がもしなるなら、面白い先生になろうと。だから今も、相談していて面白いと思われる相談員になろうと。で、さっきのAさんの話かな。で、大多数の人がAさんみたいな感じなんかな、と。僕の今の相談も聞きながらね。普段ひきこもりの相談を受けてるんですけど。何て言うかな、漠然と、したい事とか将来の事っていうのは何となくあるんだけど、さっきの、規範に翻弄されて、みたいな。社会のルールっていうのが何となく敷かれてる。みたいなところで、皆や家族からも、それで大丈夫なのか、それっていけるのか、って言われるのが見えてるから相談しないでしょ。大多数がここでどういう風にやっていくのかっていうのが、すごく自分の中でも引っかかってて。どう言ってあげればいいんだろうと。Aさんにではなくて。今相談を受けてる人たちの顔を思い浮かべながら考えてるんだけど。そこの壁ってすごい厚い気がするんですね。だから僕は、ラウンドテーブルが高校生くらいの頃にあれば来ますね。だって、さっきの二人がすごくよかったのは、あの5年間はどうだったんですかってパッと聞いた時ね。あの姿勢が一番大事やと思う。そしてその後飲みに行ったりでもすりゃいいんじゃないでしょうかっていう風に、僕は生きてきました」

現在大学院に所属しているOさん。そして府の職員として仕事をしているQさん。彼らは、予定調和の中でキャリアを構築してきたわけではないようです。たまたま通りすがったような出会いの中で、新たな道がつながり自分たちの未来を拓いていく。そういったキャリア形成のあり方でした。

そのため、まだ内定が確定していなかったA君にとっては、それはとても新鮮な生き方として映ったのでしょうか。

川畑「いや、OさんもQさんもね、そういう考えでその時期を過ごしてきたわけやけど。それを支える、ある意味での楽観主義みたいなね。今のうちに40年間埋めておかないと不安であるとか、将来どうなるか分からんみたいなね。そういう不安が一般的にはあるにもかかわらず、そういうある意味での楽観主義を支えてるものって何ですか？」

Nさん「Oさんっておいくつなんですか？」

Oさん「30です」

Nさん「30歳…、AさんやBさんは…21歳。この5、6年の差って大きいんですね？社会が変わってるのかな、経済の状態とか。かな」

川畑「社会の状況も変わるし、社会の言ってることもだいぶ変わってきてるから」

Nさん「急激に変わったっていうのは、あるんですね？」

Oさん「リーマンショックがある手前と、もろに後っていう感じですかね」

Mさん「失われた20年の間にも、一時ミニバブルがあって、リーマンがあって。リーマンで内定取り消しとか年越し派遣村とか…」

塾長「そうそう」

Mさん「その後の学生さんってものすごく保守的…、不安感から。親御さんも。今まで皆が否定してた考え方、終身雇用とか、会社の家族主義みたいな。社内旅行とか運動会とか、またすごく評価されてますよね。だからすごい不安感が、あれからは強くなってる」

Dさん「学生さんが海外に行かなくなって内向きになったって言われるのと、軌を一にしませんか。留学とかあんまりしなくなったって

いう」

Mさん「あれは就活とも関係がありますよね。もう2年から就活始まってたから留学して…」

Dさん「してる間がないんですかね」

Mさん「だから、1回生の時に2回生の分の単位取っちゃって、2回生の前期に行くとかそういう態勢で行かなきゃいけない」

川畑「何かちょっとこじんまりして、一つ一つ固めていかないといけないと思わされるような状況なんですかね」

Oさん「どっかの大学で、キャリアの授業があって。学部とかもできてないですか？」

川畑「ありますよ。それも業者入れて」

Mさん「私もキャリアコンサルタントにいろんな大学から来ませんかみたいな。心理学の大学のキャリアの方から。でも本当に意味でのキャリアは、もっと子どもの時からしっかり考える…、就職だけじゃなくって。自分の家族とか地域とか、いろんなものをまとめてキャリアって考える。キャリアが悪いわけじゃないかなって」

Qさん「さっきの…楽観的な根拠。僕今年35なんですけど、僕らくらいの頃から、もう終身雇用とか言われなくなってきました。もうそんな風潮じゃないって言われてたんで、じゃあどうなるかわからないやっというのが結構あったような気がしますね、一部で。まあ大多数ではやっぱり社会のルールがっていう風にあったんですけど。でも僕の友達とかは変わった人が多かったんですね。大学の時も。一番仲の良かったやつは、俺は劇団をやるんだと。二人で、「そうか、お互いに一般じゃないなって」言い合ったり、卒論も一週間前から書き始めたり。そういうことをよくやりましたし。その彼は結局ずっと、未だに劇団の座長として…食えてないですけど、バイ

トしながらだけれど、その道を追いつけてたりはしますけども。まあそのあたりの時代的な背景もあったんですかね」

Oさん「僕は多分逆ですね。わりと周りがレールにしっかり乗ってる人たちと仲いいですよ。その人達から見て、僕が就職とか向いてないんじゃない、会社でやれそうなタイプじゃないよね、っていう話になって。そうだそうだ、みたな。だから困ってるけど決まってる、みたな。で、無理しなくてもいいのか、って周りを逆に見て、こっちにやっばりできそうにないな。っていうのがあったんで、未だにフリーターとか学生続けてると、その子たちが心配するっていう」

Aさん「ご両親とは、話されたりしたんですか？」

Oさん「まあ、言ってるかな。親は「そんなにもう焦らなくても別にいいんじゃないって。まあそんなに適当に今までやってきたわけじゃないから、崩れることはないよね」っていうような感じですかね。その支えは大きいですね」

Aさん「なんかすごく魅力的やと思うんですよ。僕なんか、フリーターっていう選択肢、普通の大学生からしたら見えない選択肢やったんで。その道を自分で選んで行ったっていうのが魅力的に感じて。今の経験とかすごい聞いてたんですけど、そこに対するストッパーってやっぱりあるんですよ。ストップをかけるものが。世間体とかもあるし。今まで自分が仲良くしてきた友達とかも、相手が思っなくても、自分が見下されてるような気分になっていくんじゃないかな、って。そんな感じもあって。そういうところって、どうなのかなと思って」

Oさん「それは、大学の時はそこまで感じなかったっていうのが一つ。ただ感じ始めたのが、

25~26 だったかな。ちょうど皆が仕事を始めて出世をしていく時期に差し掛かる時。周りはそうやってそこの職場で自分のポジションが上がるっていうのに、自分にはないっていうのを、仕事の話とかを聞いてて思ってるけれども、逆にその大学の時の友達が、Oさんは別枠の人って見てくれてた分、その別枠の意見を求めてくれたっていうのは、すごい大きくて。あんまり聞くと、自分の中で自分に持ってないものを言われてるし、それを持ってないと、この社会で生きていくの大変だろうなって思いつつ、悩み相談を聞いたりしてると、どうにもやりきれない思っているのは確かに。でもこうなった以上、もうやっていくしかない。今すぐ就職活動って言っても、また同じになるし。今じゃあ自分ができることを考えてやっていくしかないのかなって、一人の時は思ってた」

Qさん「ちょっと話が一瞬だけ大きくなりますけど、幸せってなんだろう？っていうことなのかなって思うんです。終身雇用でいい会社に入れて、どんどんキャリア積んでいけて、いい家庭築けてっていうのが果たして本人にとって幸せなのかなっていう、そこなのかなと。だから多分、Oさんは迷いながらも、今面白いのと違う？」

Oさん「うん」

Qさん「ということが、言えるのかどうかかなと。僕も今はそういう状況。今やってることに興味あるし、楽しいなと思ってるから。だから今ここにいるんやけれど。それが外れたらどうなるかわからないよっていう。ただ多分、どうにでもして食っていけるみたいな、根拠のない自信がある」

Oさん「そうですね、あります」

Qさん「そこはなんか、共通する部分がある。何

をやっても。だから仕事はある、一応ある。あふれてるはず。選ばなければ…」

ポストモダンと呼ばれる先が読めない時代。今まで正解と呼ばれていたものが、正解であるとは言い切れなくなっていく時代。これまで機能していた社会的なシステム（例えば終身雇用制）が機能しなくなる可能性を引き受けなければならない時代。そんな時代の中を若者たちはどう生きていくのでしょうか。それでもまだマジョリティたちは、「これが正解だろう」とされている風潮や、標準化されつつある行動様式の中に巻き込まれていくのです。そこには疑問も存在するのかもしれませんが、それ以上に不安が大きく、そうせざるを得ない状況へと追い込まれていきます。

しかしその一方で、そんなマジョリティの風潮に流されない人たちがいるのです。それがOさんやQさんであったのかもしれませんが。学生たちの就活を横目で見ながら、彼らは彼らなりの道をたどって、それぞれのキャリアを形成していこうとするのです。

Cさん「なんか、塾長の小さな幸せの話…どうですか？ 私、今すごく思ったんですけど」

塾長「ああ、たまたまさっきの証券会社で、僕はある人に会った。この人は〇〇証券なんやけど、リーマンショックのあたりで転職をしていく。その人は、結構いい大学を出ていて、それで社会経済学っていう領域を学んでいたこともあっててがあって、〇〇証券に入ったわけです。当時の証券会社ってかなり給料も良いつて言っていました。それで、彼の最初に赴任地は松江だったんですね。当時、証券

会社って投資信託の新しい商品をどんどん量産していたんです。そしてそれを売って、って大きな利益を上げていた。でもやっぱり結構厳しいノルマがあったわけです。その中にはお客にとってメリットのない商品もいっぱいあって。それも売らないといけない。松江は若い人いない、年寄りが多く住んでいた地域なので、証券会社はその資産を管理しているわけ。でもその資産が、だんだん目減りしていくことになっていく。証券マンならそれも想定内の範囲なんだけど、ノルマのために黙認されていくそうなんです。そのうちだんだん社内のいい人たちが辞めていって、ということもあって。それでその後、彼自身もその狭間で葛藤を繰り返しながら、最終的にどこかで彼も辞めるっていう選択をするわけ。もうこれ以上いると、自分の人格が壊れるかもわからんって言ってました。それで、多分リーマンショック以降、証券会社も銀行もいろんなことを反省していくことになったそうですね。彼はその後、職をいろいろしながら、今は保険の営業の仕事をしている。給料も歩合給じゃないのであまりよくないそうですが今は、それなりの満足があると言います。彼には娘さん一人と奥さんがいて、彼が何を言うのかというと、「僕は小さい幸せがあればいい」と。「今の仕事はお客さんにありがとうって言ってもらえる。それが幸せの実感なんだ」と。私たちの時代は、社会の大きい物語の上に乗っかれば、個人の小さな物語もある程度満たされた。充足できてた可能性もある。だけど今は、そうとも限らない。大きい物語の上に乗っかれば、小さい物語が例えば壊れてしまったりとか。でもそれも、その仕事をしたら皆壊れるのかといえ、そうじゃないかもしれない。そこでや

っぱり小さい物語っていうのを作る力があるのかもしれない。フリーターの話聞いてたら、面白い。そこには、目に浮かぶような光景があるので、面白いわけですよ。それを面白いと思いながら多分彼は生きてると思う。でも皆が皆、そういうわけでもないような気もする。そうすると、個人の中にちゃんと個人の物語を築ける力っていうのがあるような気がしてて。さっき言ったように、大きな組織の中で、自分はこうやりたいんやけどそれをするな、これやれみたいなことが、どんな業種でも多かれ少なかれ当然ある。でもそういう中でも、何か物語を描ける人もいてて。全く物語を描けず苦しみ続ける人もいてて。あるいは、物語を作るなんていうことはどうでもいい、適当にやっておけて思う人もいるかもしれへんし。そういうところの話やね？」

Cさん「はい。なんか思い出しました」

川畑「それが小さな幸せ、イコール小さな物語？」

塾長「そうそう」

Dさん「その小さな幸せっていうわけじゃないけど、金を稼がないと生活やっていけへんから働いていくわけですけど。働く事って、結構私の今までの社会人人生の中でも、辛い事が半分くらいあるんですよ。ひどい話やけど、私の入った頃はコンピュータなかったから、膨大な資料を電卓叩きながら、徹夜しながら一枚のシートにまとめないといけなかった時代もあった。その時に、こんなつらいのやりたくないな、と。投げ出したいなと思う事もあるんやけど、そこはやっぱり使命感ですよ。これをやり切らないと動いていかへんっていう事と、その中でそれをやり切ったっていう達成感。これをやり切ったって思ったら次また山のように仕事来るんやけど、

今の仕事はね、いろいろと言われますけど、中身が面白いので。面白いっていう言い方は語弊があるかもしれんけど、やっててやりがいがあるので。やってて非常に自分で満足できる部分が大きくあるっていうのがあって。そういう自分なりの楽しみをどうやって見つけるかみたいな。小さいところからでも。だからここまで続けてこられたっていうのが逆にあるんですよ。もう毎日毎日2時、3時くらいまで仕事する時代もあったので、そんな中で帰ってお風呂入って寝る。朝は遅刻しないように行く、その繰り返し。1ヶ月とか2ヶ月とか続くし。一番ひどかったのは、徹夜が3日。5時くらいにタクシーで家帰って、シャワー浴びて着替えて出てくるっていうのが3日あったりとか。そんなこともあるんだけど、その中で自分なりにこれやり切ったら出来上がるんや、みたいな気持ちがあった。まあ頑張ってたかな、みたいなところがものすごくある」

Mさん「この間、産業カウンセラーの研修会で、新型鬱って今すごく若い人に多いっていう。新型鬱って、使命感とか、自分の仕事に使命感を持てる人ってすごくストレスに強いから、やっていけるんじゃないかなと。やらないと困るってわかるからやらなきゃいけない。何のためにやるかわかってないとそれに耐えられない。それが今の会社の中では、この仕事は何のためにやってるかがわからなかったり、やっぱり最初にものすごく自己理解とかをやりすぎて会社に入ると…、私はこれとこれとこれに絶対向いてて、一つの仕事に「これだ！」って思ってしまうと、それ以外の事をやらされると耐えられなくて…」

川畑「だって、それ以外は向いてないって出てるんやもんね」

塾長「そうかそうか」

Mさん「自己理解に縛られない方がいいよっていうことがあるんです。柔軟性も持たないと青い鳥症候群みたいになっちゃうんで、これしかないというのは…。仕事の種類とかじゃなくって、「こういう生き方がしたい」っていうのしかないと思うんですよ」

塾長「だからね、今の話で言ったら、「自己理解が必要なんや」って皆が言い始めると、皆どつと自己理解系に行って、「自己理解なんて必要ないんや」って言われると今度は皆が反対する。そういう人たちが、自分の物語をどうやって築けるんだらうっていう思いが私の中にすごくあって、そうやって翻弄される若者たちが大量に作られているような気がするんです」

川畑「さっきもね、就活で、自分のアピールしないとダメでしょ。私は大学時代にこういう辛い事があって、それをこうやって乗り越えてきましたって。確かにそれは事実に基づいてるんやけど、どっか自分って言う商品のコピーを言ってる感じやな。それは表やけど、裏には隠してるドロドロしたことがある。この自分がアピールしたことを全部信じてるわけじゃないやん。信じてない部分っていうのかな。それを絶対化しないで、自分なりに整理するものっていうのかな。あるいは、心が折れるっていうコトバがあったけど、ここで心が折れるか折れないかの二極じゃなくて、自分の実際を自分のコトバで語っていくみたいなね。そこら辺の、自分のコトバで自分の状態にぴたっと合ったようなことを探していくことが、どこかで小さな幸せとか物語を作っていくっていうことにつながるんじゃないかなという感じが、ちょっとしたんですけどね」

「個人の小さな物語」の話は、セカンドキャリア論と関係があります。個人のファーストキャリアが何らかの事情で行き詰まった時、次のキャリアを模索します。この時、模索されるセカンドキャリアは、ファーストキャリアの反省に立ちます。自分自身が何を求めていたのか、自分のキャリアを通して何を描こうとしてきたのか。そんな物語性が表に出てくるように思うのです。

川畑「はい、そしたらね、最後に一言ずつ。今日の3時間で、何かあれば」

Bさん「はい、普段は出会わないような方々と貴重なお話しをさせていただいて…。私も何か、人生とかキャリアとかについて、まあ就職は決まったんですけど、もう一回考えてみたいなって。振り返ったり、問い直したり、もう少し自分の中でしてみたいなって思いました。ありがとうございました」

Qさん「はい、今年はまた来れることを望んでおりますけれども。久しぶりに同じ空気が吸える人を見つけたなど。面白かったです。ありがとうございました」

Dさん「はい、就活って考える時に、いろいろと苦労されてるし、昔と全然違うよなって思ってた聞いてました。まあでも私は私なりの生き方しかできないし、最終的には他に能力がないからここにしがみついているっていうのもあるんですけど。まあそんな事を考えながら聞いてました。ありがとうございました」

Nさん「今ね、Bさんが普段会えない方に会えて、っておっしゃってましたけど、普段会えない健康な学生たちに会えて私も面白かったです。純粹にそれだけで。いろんなメディア通して就活とか…。それから、さっきもちよっ

と振っていただいたけど、私どももなかなか、施設で障害の重い人への支援のところへは本当に人材確保が難しく…。ただ人が来てくれたらいいだけじゃなくって、いい支援をしていただきたいけど、なかなか本当に、障害のある人が十分豊かに暮らしていただけるだけの支援のスタッフが揃わないというところで、非常に関心もありますし、絶えず職場フェアにね、そういうのも活用させていただいたり、いろんなことしましたけれども、やっぱり今でも本当に人が薄いなというところなんですよ。それでもとにかく、今どんな人たちがどんな風に活動してるのかな、っていうのはとても関心があったので、さっき言ったように、興味深いお話が聞けました。ありがとうございます」

Mさん「今までの僕の、先入観を持って決して選ばなかったであろう人生の人達の話がいろいろ聞いて、考え方に幅があるんじゃないかなと思って、面白かったです。ありがとうございました」

Aさん「QさんとOさんの話がすごいよかったと思うんですけど、やっぱり就職活動で内定もらえないっていうプレッシャーの中で、その一点しか見えてなかったっていうところで、もっと視野が広がったような気がします。何かストレスとかが、ちょっと解消できたような気がしました。できれば、そうですね。QさんやOさんのように、面白い話ができるような人になりたいなと思います」

Mさん「去年からずっとラウンドテーブルには来なかったんで、やっと今日来れたので、よかったと思います。面白い話ができるっていうのはすごい力のある方々と思うんで、私もそれを目指したいなと思いました」

Rさん「私のところの子どもも今高校生なんです

けども、実際にいろんな話を聞かせていただいて。うちの子も数年後に同じような思いをするのかなと思って聞いてて、すごく参考になりました。ありがとうございました」

Pさん「そうですね、話を聞きながら自分のいきさつを振り返ってみて、違う見方もあったんだなっていう反省も踏まえて聞いてました。また今後の自分の動き方にも活かしていきたいなと思います。ありがとうございました」

Oさん「ありがとうございました。僕ちなみに大学院では、出会いの研究をしているんですね。「偶然」っていうキーワードで研究を進めてるんですが、こうした偶然の出会いではないけど、こうやってみなさんが集まったっていうことがすごく縁のあることだなと思ったんです。だからこれからも、皆さんと一緒に楽しさをバージョンアップさせていける会になったらいかなと思いました。ありがとうございました」

塾長「川畑先生、どうもありがとうございました。いい進行で、感動的でした。それから、ゲストの3人のみなさん、ありがとうございました。何か、議論の種っていうのか、またこういう事をもとに我々もまた何か考えたいなと。今日話していただいた方も、何かつかんでもらえたかなと思います。ラウンドテーブルって、結論を出さないっていう事が前提になってるので。要するにここで何か、楔みたいなものかも分からないけど、またそれぞれのフィールドに戻って、ああやこうやって考えるきっかけができたかなという思いでスタートしました。そのためには、一人ではやっぱり無理なので、できるだけ多様な人に来ていただいて…そこら辺の多様性っていうのは重要で、やっぱり視点が違うので。そう

いう視点をずらす中で見えてくる世界があるのかなと。それから、私はキャリアっていう事を今年はどうしてもやりたいなと思ったんです。というのは、キャリアっていうコトバをいろんなところで使われすぎてる気もするんですよ。例えば、何かの助成をとるのにも、「キャリアって付けとけばいいわ」みたいな風潮もあって。それくらいなんか…、キャリアブームっていうのか。何なんやろうなって思ったりもするんですよ。だからあえてそれを、いろんなところからあぶり出すようなことができればいいのかなっていう風に思ったりもしてるんです。だから「就活」って、わりとポピュラーなキーワードで。やっぱりそこを介しているいろいろ見えてくる世界っていうのがあるような気がするので、今回はこういう事をやりました。ありがとうございました」

「就活」そこには、実に生々しい学生たちの葛藤が見え隠れしていました。若者の支援にあたる者たちは、その生々しい現状をどこまで知っているのだろうか。あるいはたとえ知っていたとしても、その現状をどこまで実感としてつかんでいるのだろうか。そういった思いがありました。もし、その感覚を持たないまま実際の支援活動にあたっていたとしたなら、そこで展開するものは彼らの支援となり得るのだろうかという疑問があったのです。

学生たちの話から、彼らが就活を通して突き付けられていく現実も見えてきたように思います。学校という、ある意味で外の世界から隔離された社会の中で生きてきた彼らにとっては、この就活という機会が、

初めて防波堤の外へと出ていくような経験だったのかもしれませんが。

2 回生の後期からスタートする就活モード。就活準備としてボランティアやいろいろな講座に参加し、やがて 3 回生になれば、ボタン一つで完了する 50~100 社へのエントリーと、そこから怒涛のように押し寄せる大量の情報と次々と突き付けられる数々の課題。そんな混沌とした状況と不安、そして焦りの中で、彼らが自分の主体を見失っていくような現実がありました。そして、それが現実の厳しさであり、その中で個人の強さが試されます。要するに厳しい現実とは、その厳しさを課題として捉えられる学生と、その厳しさの中自分を見失っていく学生とを区別するのです。

しかし一方で、その大きな渦の外側には、彼らとは違ったキャリア形成の過程がありました。楽観的な人生がそこにあり、出会いの中で紡がれていく人生がありました。また、それぞれの人生の物語が描かれる世界があったのです。そのどちらがいいのか、どちらが正解なのか。そんなことはわかりません。正解など、どこにも存在しないのでしょうか。ただ今の大学生たちの就活が、絵にかいたような理想的なキャリア形成過程を表現していないことは確かです。そこから考えると、不登校やひきこもりの経験を持った若者たちのキャリア支援やキャリア教育の目指す方向性も、あらためて問い直さなければいけないように思うのです。

